

anupayam kena katham vadeyya,

所道説無愛著

attham nirattham na hi tassa atthi:

已不著亦可離

adosi so ditthi-m-idheva sabba ti.

(Sn.787)

從行拔悉捨去

「和訳」たより近づくものは実に諸法に於て言説に近く、たより近づくかない者は何故に何の如く言うだろうか。何となれば彼には我も非我もあるなし、彼はここに一切の見を払い除いた。

パーリ語聖典、或いは漢訳聖典のみによつて仏教思想の原意を十分理解することは困難であると思われる。故にパーリ語漢訳両聖典或いはサンスクリット語聖典、チベット訳聖典等を比較研究して、その一致点を眺めればその原意が明確になり得ると思うのである。

竜樹に於ける二諦説

— 嘉祥の理解を中心として —

真 野 成 英

三論宗に於ける二諦説は三論教学全体の組織を形成する教理として全面的に受容せられたのである。そして嘉祥の二諦説の発展の特色は八不中道である。この八不中道によつて嘉祥の二諦説を眺めると世諦中道、真諦中道、二諦合明中道であり「八不具三種中道。即是二諦也。」と主張した処に彼の特異がみられる。

中論の二諦説は世俗の縁生法なるものを空なる勝義の真実の仮法と認め、この縁生法である仮法によつて空なる勝義の真実を自覚させる立場であり、縁生法の真実である姿なき空へ帰ろうとする仮から空へ向かう徹底的な否定の立場であつたが嘉祥は世俗の仮法を直ちに空の真実として、積極的に肯定していつた。即ち嘉祥は世俗諦と真諦とを「空仮相即」の立買から並列的に並べて、しかもそれを肯定的に見ていつたのである。竜樹の徹底し

た否定の教學を肯定的に見ていることは彼の三論玄義や大乘玄論に見いだされるが、これは嘉祥自身の中国的な思想、中国人特有の思考形式をもつて竜樹の教學を解釈していったと見ることは出来ないであらうか。

中国人特有の思考形式の根本として、物及び法を絶対に肯定すべきものであるとしても絶対に否定さるべきは存在しないと云う考え方の形式がある。かゝる思惟方法は中国ではかなり古い時代から存在していて、中国人によると存在そのものは絶対に否定さるべきものではないと考える。つまり中国人にとつては絶対に否定さるべきものは存在しないのである。

「世諦に依らなければ勝義諦は理解されない。」というのが中論即ち竜樹の趣旨であつて、世俗の立場を遮遣することによつて勝義は証得されるのである。これを中国人の思考形式である存在を肯定的に見る中国在來の思想によつて見ていつたのではないであらうか。

嘉祥は生と滅とを生は滅あるによつて生であり、滅は生あるによつて滅であるとして、生と滅とを体正と云う

立場で見た。そして体用、仍きとしては、眞諦と俗諦に分たれる。然しそれは竜樹の勝義諦と俗諦との關係ではなく、全く並列的に同じ比重をもつて、しかも肯定的に眺めていつた。この肯定的な組織は一面中国の相反応合の思考形式に類似している。勿論嘉祥は三論玄義中、三論の祖と云われる僧肇のことを次の如く触れている。即ち僧肇は若くして老莊を必要とした後、維摩經によつて仏教徒となつたと云うことを引いている以上、老莊的なものではないことは分るが、然し多分に中国思考形式たる相反応合の理論が大きく支配していると思われる。たとえば、老莊思想の中に両者結合、即ち相反応合の思想は異なる二つを對比させて生は生として立ち、滅は滅として立つものの機能が相互に作用し合うところに一つの展開がなされると見るのである。このような關係を相反の關係と呼んでいるが、この關係に立つものは、一方では応合の關係をも構成する。この応合というのは、相反の二者、即ち生滅の二者が本来の性質を失うことによつて始めて達せられるのではなくて、本来の性質の上に立

ち相互に作用し合つて一つの展開をすると考えられる。

又否定による併列の不生不滅の如きも、決して生滅相反の思想そのものを否定しているものではなくて、生滅の内に於いて一方的ならざる立場を想定して、相反の本来の面目を失わないためである。この立場に立つて見ていつた所に「空仮相即」の立場が表わし出されたものと思われる。

吉蔵によつて開かれた三論宗、即ち鳩摩羅什訳の中論、十二門論、百論によつて組織せられた教学が羅什―僧肇思想の直系的大成であることは云うまでもなく、八不中道、破邪顯正を高唱した吉蔵は、什門下でも僧肇を解空才一と最も高く評価し、その著、肇論を重要視している点から、嘉祥の肇論に於ける影響を見てみると、僧肇は中国の老莊玄学と般若学との教養の上に鳩摩羅什を直接の師として、印度の竜樹―提婆の仏教を伝えたが、僧肇の仏教を中国的たらしめているもの、それはおそらく僧肇に於ける老莊思想がその基盤的な力であつたものと思われる。

支那民族が矛盾した現実社会の中で死ぬ事を考えることなしには、生きる事が考えられず、無いことを考えることなしに有ることが考えられなかつた社会に苦しみ悩みつづけた一人の中国人である以上、彼にとつて仏教は解脱の中国的思索としての老莊思想の新しい展開であり、仏教に於ける縁起の思想にしても莊子の相与相待の論理を基礎として僧肇には理解されているのである。そして相反応合の論理も僧肇の肇論のいたる所に見い出すことが出来る。例えば有無の二つの概念を有でもなく、無でもないと言つている。云い換えれば有でもあり、無でもあると云うことであり、この考え方が嘉祥に相当の影響を及ぼしている。然し僧肇は二諦の区別を概念として使用することはあるにしても、それを方法として明確な自覚にまでもたらしめているとは云い難く、その点嘉祥は二諦の区別を方法論として、三論教学全体にとり入れている。これらのことが竜樹教学を探究することによつて、僧肇に歩一步を進めたと言ひ得るであらうか。然し彼の二諦説の中にはたとえ彼の内容が仏教的であつたとして

も、その表現方法には中国的な思想が中国人の血と表われていると見る事は出来ないであらうか。

かくのごとくして、中論の中に含まれている処の肯定的面は中国人の性格によつて、より明確に組織づけられたようである。

三論の教義は、一見複雑化した哲学的に見られ宗教的には無価値に思われがちであるが、釈尊の実践された二辺を離れた中道的立場を竜樹が有無の一方的な偏執から離れた「空」を宣揚し、そして嘉祥に至つて、更に明確に説き示されたのである。私は以上の如く嘉祥の二諦説の意義と特色を見たいのである。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。